

戦後における香港地域研究の変遷

——人類学を中心に——

河口 充勇

KAWAGUCHI Mitsuo

1. はじめに

戦後初期に社会主義化に向かった中国では人類学（社会学も）が否定されたため、海外の人類学者の間で、香港、特に新界（New Territories）が、臺灣や東南アジア華人社会とともに「残余中国 Residual China」として注目を集めるようになった。まず5、60年代には、多数の人類学者（ほとんどが西洋人）が、当時においても伝統中国的な様相を大いに留めていた新界農漁村を訪れ、そこで参与観察を中心にフィールド調査を行った。一方、60年代末頃から、社会学者たち（はじめは西洋人が中心を占めたが、70年代から現地人が取ってかわった）が急激な工業化・都市化の中で様々な社会問題を引き起こしていた当時のニュータウン等でサーベイ調査を行うようになった。確かに70年代以降には一部の人類学者たちの関心が都市部の方へも拡大したものの、概して、香港では、人類学的フィールド＝新界農漁村、社会学的フィールド＝都市部という「棲み分け」ができあがり、その結果、都市社会としての香港に関する質的研究という領域は、これまで十分な蓄積を見てこなかった。既に幾つかのレビュー論文（Traver 1984 大橋 1997 a 等）が、現代香港の内実を深く知るためにも、こうした領域を更に掘り下げるべきであると強調している。

ところで、本稿における作業も、やはりこうした基本認識を共有した上での、既存の香港地域研究に関するレビューワークであり、その目的は、

先行のレビュー論文の批判的検討にあるのではなく、寧ろそこではあまり強調されなかった点に改めて注目することで、補完的展開を目指すことにある。ここで筆者が注目する点は、より大きな広がりの中における研究フィールドとしての香港が持つ意味合いの変遷ということである。改まって強調するまでもなからうが、香港は、現実においても研究上においても、常に「外」と繋がってきたのであり、それに関する語りは、安易に一般化するわけにもいかないが、かといって、閉じられた地域性に縛り付けられるべきでもない。ここでは、特に筆者が重要と考える海外華人社会という「外」との繋がりに注目する。

以下では、この点を構成の軸として、改めて香港地域研究の変遷を通時的に敷衍してみたい。本稿では、特に人類学の系譜を扱うが、社会学の系譜に関しては、改めて別項を当てがいが、両稿を以て姉妹編としたい。無論、このように限られた紙幅で半世紀にもわたる研究系譜を満遍なく取り上げるのは不可能であり、ここでの作業は、あくまでも筆者の関心に強引に引き寄せた形でなされた暫定的なものであり、また、個別研究の細かい検討よりも大きな流れを捉えることに主眼点を置いているということを最初にお断りしたい。

2. 華人世界の中の香港

まずは、海外華人社会と香港との歴史的な繋がりについて簡単に見ておこう。

歴史家王廣武（Wang Gung-wu）の華人に関す

る有名な類型 (Wang 1991: chap. 1) によれば、まず最も古い「華商」型は遅くとも宋代以降には海外 (特に東南アジア) に展開していた商人たちによって、「華工」型は 19 世紀後半に増大した新大陸や植民地地域の鉱山や鉄道建設現場で働く肉体労働者たち (「苦力」或いは「猪仔」と蔑称された) によって、「華僑」型 (ここでは一般に用いられるより狭義に) は今世紀初頭の中國ナショナリズムの高揚との関わりで生じた愛国者たち (商人か労働者かを問わず) によって、そして最も新しい「華裔」型は戦後にそれぞれの受け入れ国に帰化しつつも何かしら文化的に「華人性 Chinese-ness」を留めている人々によって、それぞれ構成される。無論、華人移住の背景には、送り出し地での政治経済的混乱や生態的飽和状態等のプッシュ因、または、受け入れ地での労働需要・上昇機会や政治的安定等のプル因 (或いはその両方) が存在した。華人移民の主要な行き先としては、19 世紀半ばまでが東南アジア (「華商」中心)、19 世紀半ばから 1880 年代までが北米・オセアニア (「華工」中心)、1880 年代から第二次大戦頃までが東南アジア (多くの華人が「華僑」化)、そして、1960 年代末頃以降が北米・オセアニア (「華裔」中心) というように推移してきた。

今日の華人世界では、最早「華工」型は大きな割合を占めておらず、また、海外における中國本土への政治的コミットメントの弱化とともに、「華僑」型も廃れてしまった。その一方で、いつの時代も多くの華人が商業に携わっており、今日においても「華商」型は相変わらず有力である。また、「華裔」型もそれに劣らず大きな割合を占め、その中には高度の学歴・資格・技能を備えた「持てる」移民とその家族も多く含まれており、彼らは従来の華人像を根本的に覆す存在となっている。かつて華人移民は「持たざる」移民 (男性偏重で、ごく限られた職種に就業) を中心とした

もので、そうした彼らの間では血縁・地縁的ネットワークによる相互扶助や営利活動が行われ、更には一握りの有力者を中心にした同郷団体・宗親団体・同業団体等のボランティア・アソシエーション (以下では VA) が大いに発展を見た。しかし、60 年代末頃 (この時期、北米・オセアニア受において人種主義的移民政策が大幅改善) を一つの契機に、その後は家族移住がより一般化し、また、公的な移民関連サービスの拡充により、そのような伝統的な移民社会形態は大幅に崩れてしまった。そして、よく言われるように、華人のメンタリティは、概して、故郷に錦を飾ることを夢見る「落葉帰根」型 (実際に錦を飾れるのは極少数であるが) から、居住地での土着化に向かう「落地生根」型へと推移してきた。

次に、以上の華人史の概観を念頭に置きつつ、香港の歴史を簡単に振り返ろう。

英領植民地香港は、1841 年の香港島割譲、1860 年の九龍割譲、そして 1898 年の新界租借という段階的拡大過程を経て形成され、この間、中継貿易を主体とする植民地経済の発展に伴い、その後背地から多くの商人 (「華商」) 並びに労働者 (「華工」) を吸引した。海外 (特に東南アジア) との商業貿易に関しては、例えば、「南北行」という貿易商の同業団体が早くから発展を見ていた。また、海外への契約労働者の移動に関しては、香港は、廣州、澳門、汕頭、廈門等とともに、その重要な送り出し港となっていた。更に、中國ナショナリズムの高揚に関しては、孫中山が一時的に滞在したことからして、香港もその震源地の一部であり、ここでも「華僑」が多数見られた。ところで、人口統計によると、香港の総人口 (その絶対多数を常に華人が占めた) は、1841 年には約 7,500 人 (香港島のみ) であったが、1931 年には約 85 万人に膨れ上がった。無論、戦前の香港においては、新界は、租借地ということもあ

って植民地政庁が旧慣温存措置を採ったために、伝統中國的農漁村社会の様相を大いに留めていたのに対し、都市部の方は、人の出入りが激しく（「落葉帰根」型）、「持たざる」移民中心（男性偏重）、血縁・地縁の紐帯に基づく相互扶助や営利活動、更には各種VA形成等といった具合に、海外（特に東南アジア）の華人社会と少なからぬ類縁性を呈していた²⁾。

ところで、戦後初期には、中国本土での内戦とその後の社会主義化によって多数の難民が香港に流入し、1950年には総人口が一挙に200万人を越えたが、こうした難民たちは、中国が閉ざされたのを契機に中継貿易主体から地場製造業（上海からの逃避資本家を中心に）主体へと大転換を図った当時の香港経済にとって願ってもない労働力供給源となった。時代が下って60年代半ば頃になると、初めて香港出生者が総人口の過半数を占めるようになり、徐々に香港住民の間に香港への帰属意識が芽生えるようになったと言われるが、その背景には、まずは何より高度経済成長、そして、従来のレッセフェール主義から大幅に後退（特に1967年の「香港暴動」の反省から）した植民地政庁による公的社會事業拡大（住宅・雇用状況の改善や初等・中等教育の普及等）、更に、テレビを中心とした土着大衆文化の生成・発展等に伴った、社会環境の画期的向上が見られたのである。このような全体社会の近代化が進展する中で、伝統的な華人移民の社会形態（同郷＝方言集団による相互扶助やコミュニティ形成・VA形成等に象徴された）は急速な解体に向かったし、また、新界でも、急速なニュータウン開発（70年代に本格化）に伴う大量人口流入等によって、伝統的農漁村社会の形態はやはり大幅に変容していった。

更に時代が下って、1978年の中国本土の対外開放という一大転換期は、中国・香港間のヒト・

モノ・カネ・情報の行き来を活発化させたが、そのことは、両者間の経済的・政治的・社会的・文化的格差（「大陸人」ではない「香港人」）を多くの香港住民に知らしめることとなった。また、返還問題に絡む民主化要求運動高揚（1989年「天安門事件」の折の大規模デモンストレーションに象徴される）や大量移民流出（1982年から96年の間に離港した者の総数は約60万）等といった過程を経る中で、彼ら香港住民は、嫌がおうにも香港とは何かを自問させられ、そして、「家在香港」という思いを強めていった。しかし、こうしたアイデンティティに関する微妙な問題を抱えつつも、この時期の香港は、経済面では、中国（特に廣東省）の急激な経済発展とうまくリンクすることで至って順調であった。急激な脱工業化（地場製造業の多くが中国本土に工場を移転）を経る中で、香港はアジア環太平洋圏の金融・サービスセンター並びに情報・文化発信センター（STAR TVの成功に象徴される）にリニューアルし、それによって、トップエリートに限らない幅広い層（多くが同時代の香港での高等教育普及の恩恵を被ったホワイトカラー）が海外への移住或いは投資等というオプションを獲得することになった。彼らのグローバル（中国本土も含めて）な展開は、既存の海外華人ネットワークの活性化に繋がっており、こうした彼らが、臺灣や一部の東南アジア華人社会からの「持てる」移民とともに、先の「華裔」の代表例であることは言うまでもない。

とはいえ、そこに負の側面が全くないとも言えない。彼らは、単に政治的な中華人民共和國への忠誠云々という問題に対してだけでなく、更に、経済面或いは社会文化面において自身とは一線を画する他の華人系集団との差異云々という問題に対して大変敏感である。（森川1996）「香港人」という意識の高揚は、決して華人という大枠を否

定するものではなかったが、その内側での非「香港人」との境界設定とその排除・差別ということと表裏一体であった。こうした点は、既存の香港地域研究、特に「香港人」による研究を振り返る(第5節)上で、非常に重要な意味を持つ。

以上の概観から、ある意味でかつては「どこにでもある」華人移民社会だった香港(特に都市部)が、戦後に急激な社会変化を経る中で、近代的な市民社会に生まれ変わり、その後、様々な特有の事情から、ますますそれ特有の地域固有性(「香港人」アイデンティティの高揚に象徴されるように)を呈するようになった(かといって「特殊」の一言で片づけるわけにもいかないが)、ということが了解されよう。

3. 人類学的海外華人研究の展開： 東南アジアを中心に

さて、以下では、実際に先行研究のレビューワークに入るが、まずは、少々遠回りをして、戦後の人類学的海外華人研究(東南アジアを中心に)の展開について敷衍しておく。

東南アジア華人社会での人類学的研究の口火を切ったのは、まずは英国人類学の名門 London School of Economics and Political Science (LSE) 所属の人類学者たち³⁾であった。この LSE から最初に東南アジア華人社会へ来たのが中国生まれの田汝康 (Tien Ju-kuan) であり、彼は、1948 年にマレーシア・サラワクの華人コミュニティにおいて親族関係や社会組織の問題から経済活動や政治権力の問題までを幅広く扱った民族誌研究を行った (Tien 1953)。少し遅れて、やはり LSE の M. Freedman がシンガポールにて華人の親族と婚姻に関する研究を行い (Freedman 1957)、また、同じく LSE の A. Elliott もシンガポールにて華人の霊媒信仰に関する研究を行った (Elliott 1955)。上記の三者の研究は、東南アジアに造詣の深い R.

Firth や E. Leach 等当時の LSE 人類学の指導者たち(英国社会人類学の構造機能主義第二世代の中心人物)の強力な支援によって可能となったのであり、従来アフリカに圧倒的な比重が置かれてきた英国社会人類学において、この頃から東南アジアが、新たに重要なフィールドとして注目を集めることになった。

以上のような LSE の人類学者たちの開拓の後に、G. W. Skinner が、1950 年代初頭にバンコクの華人の経済活動とリーダーシップに関する研究を行った (Skinner 1958)。その他にも、マニラの華人の親族関係や社会組織に関する Amyot (1960) やプノンペン⁴⁾の華人の組織的ハイアラキーを植民地支配体制と絡めながら扱った Willmott (1967) 等が、5、60 年代の人類学的華人研究の代表例として挙げられる。更に、70 年代以降になると、マレーシア・ジョホール州のマーケットタウンの華人コミュニティに関する民族誌研究である李 (1970)、マニラの華人の同郷・宗親団体に関する施 (1976)、パプア・ニューギニアの華人の親族関係、経済活動、政治への関与等に関する Wu (1982)、マレーシア・マラッカの Baba (相当程度土着化=マレー化した華人を指す民俗語彙)の伝統文化とエスニック・アイデンティティ保持等に関する Tan (1988) 等に代表される華人人類学者による研究⁴⁾も大いに進展し、そうしたところでは、研究者自身が華人であることもあって、一層歴史資料の方に注意が払われるようになった。

ところで、以上のような戦後の東南アジアでの人類学的華人研究(以上に触れなかったものも含め)にざっと目を通してみると、大多数の研究が同郷・宗親・同業団体等に代表される伝統的な華人の VA を研究媒介・対象⁵⁾としてきたことに気付かされる。この点に言及している葉春榮 (Yeh Chuen-rong) によれば、例えば、親族的側面に関

しては、彼らの故郷の宗族組織のあり方が移民先でどのように表出されるかが注目され、その場合やはり擬似的宗族組織としての宗親団体がよく議論された。また、経済的側面に関しては、「東洋のユダヤ人」等とも呼ばれる彼らの商業的成功が如何にして可能であったかが問われ、その要因として、いつも彼らの強力な家族・親族的結合とともに VA の組織的結合が挙げられた。そして、政治的側面に関しては、概して次の二パターンが見られた。一つは、それぞれの華人社会内における VA 成員のリーダーシップに関する議論。例えば、ある個人がどのようにある団体のリーダーとなり、そして更にその上位団体のリーダーとなるのか、あるいは VA 間の競争や共存が如何になされるか等の問題が議論された。もう一つは、当該社会の外（特に中国本土での政治情勢）からの影響に関する議論。本国でのイデオロギー対立（清末の保皇派と革命派との対立や共産党と国民党との対立）の影響は、どの華人社会でも組織間の対立に色濃く表れていたのである（葉 1993 pp. 176-9）。

このような VA 重視の研究パターンを定式化するのに最も重要な役割を果たしたのは、葉も挙げている Freedman (1960) と Crissman (1967) の二論文である。Freedman は、歴史資料や先行研究を基に（彼自身は中文を読めなかったが）、シンガポールにおける華人社会組織の発展過程（今世紀初頭における中国ナショナリズムの高揚を一つの転機とした秘密結社優勢から合法的 VA 優勢へという流れ）を振り返り、同郷・宗親・同業団体等の各種 VA が踏み込んで議論されるべきことを強調した。また、Crissman は、いくつかの既存の調査研究を基に、華人社会の重層的な組織的ハイアラーキーの性格とその中に配置された各種 VA の機能を説明し、それによって、東南アジアに限らず世界中の華人社会に適用可能な

「分節構造」モデル⁶⁾を提示した。彼の脳裏では、華人社会は基本的には大体どこでも同じようなピラミッドの様相を呈していたようで、その大胆かつ明解なモデルは、その後様々な地域での海外華人研究で取り上げられ、概ね肯定的に受け止められたようである。

以上のような Freedman や Crissman 等によって定式化された人類学的華人研究のその後の展開に対して、葉は、それが所謂「Freedman パラダイム」に縛られてきたことを強調する。その基本認識は、「海外華人を中国本土への窓と見なす」（G. W. Skinner の言）ということであり、換言すれば、東南アジア華人社会を以て中国本土に居場所を失った海外の人類学者たちのための「残余中国」とみなすということであった。では、このような発想の何が問題なのか。葉は、海外華人社会の研究が実際に本土社会を理解するのに役立つことを認めながら、それでも、海外華人社会をただ本土社会の延長と捉え、ただ理念的に拡大された伝統中国社会・華人社会的コンテクストの中での議論に終始するだけでは、やはり片手落ちになってしまうとする。これまで海外華人社会を議論する研究者のほとんど（一部のエスニック関係等を論ずる者を除いて）は、受け入れ地特有のコンテクストの重要性をかなり等閑にしてきたが、実際、華人たちがそれぞれの受け入れ地において他集団から完全に孤立した人々であるはずはなく、それゆえ、彼らの親族的側面も、経済的側面、政治的側面も、やはりローカル・コンテクストに大きく規定される（葉 1993 pp. 181-3）。

ここでの問題を簡潔に述べると、まず一つには、このような「残余中国」的発想からくるア・プリオリな伝統中国社会・華人社会的コンテクストの設定と、それゆえのローカル・コンテクスト切り捨てという点であり、更にもう一つ、そのような発想とも大いに関係するが、理論面（構造機

能主義)の過度の抽象性・非歴史性(Crissmanのモデルに顕著)と、それゆえのローカル・コンテキスト切り捨てという点、である。ただ、以上のようなローカル・コンテキストの多様な現実の切り捨ては、皮肉なことであるが、発展期の人類学的海外華人研究の「わかりやすい」パターンを可能にしたのであり、逆に、それに対する注意の喚起は、地方史家になるわけにはいかない人類学者に対して新たな難題を投げかけることになった。無論、このようなことは、華人研究に限られた問題ではない。

以上では、香港から離れた所での研究展開を敷衍してきたが、何故このような遠回りが必要だったのかというと、香港の人類学が他でもないFreedman その人によって開拓されたものであり⁷⁾、人類学的フィールドとしての香港も、やはり戦後になって注目されるようになった「残余中国」であったからである。

4. 人類学的香港地域研究の展開

以下では、香港における人類学の系譜について振り返るが、その際、新界農漁村でなされたものと都市部でなされたものに分け、更に両者を70年代までのものと80年代以降のものに分けて整理する。

1) 新界農漁村研究

(1) 60~70年代

香港が海外の人類学者に注目されるようになったとは言っても、まずそこで注目されたのは香港島・九龍ではなく新界の方であった。理由は至極明瞭である。そこでFreedman等が知りたかったのは、それまで彼らが移民を通して「間接的」に見ようと努めてきた社会、即ち伝統中國的農村社会が一体どのようなものかということであり、それを調べるための最も理想的なフィールドが、他で

もない新界であった。Freedmanは言う。「1949年以来、新界は、ますます調査フィールドとして際立ってきた。そこでは政治的妨害に遭うこともなく、伝統中國的農村生活の生きた題材に遭遇できる。」(Freedman 1976: 193)皮肉にも帝国主義時代に創られた国境のおかげで共産主義者たちの伝統破壊から守られた新界は、清末頃の伝統中國的農村社会の形態を戦後初期に至ってもかなり留めており、いわば「生きた化石」の博物館として、中国本土に行きたくても行けない研究者たちを魅了した。それゆえ、こうした研究者たちの目的が「本物」の伝統中國的農村社会のあり方を「本物」から最も近い新界での観察を通して紙面上に再構築することにある限り、「本物」から相対的に遠い都市移民社会の方はさしたる魅力を持ち得なかった。

以下では、まず簡単に香港でのFreedmanの足跡について触れておこう。彼は、まず1958年に歴史資料や戦前期の先行研究⁸⁾を基に華南の親族組織に関する著作を出版しているが、その後そこで提出したモデルを検証するために新界にて短期間のフィールド調査を行い、その成果を基にした著作を1966年に出版している(Freedman 1958=1991, 1966=1987)。以上の二著において、彼は、既に多くの議論がなされていた宗族と呼ばれる伝統中國の単系出自集団に改めて注目し、これに構造機能主義第二世代のE. E. Evans-PrichardやM. Fortes等のアフリカ部族社会研究から援用したりニージ概念を当てがひ、その組織構造並びに機能を明らかにしようとしたのである。そこでは、中國農村社会の宗族=ニージが必ずしもアフリカ部族社会でのように構成要素の均質性を前提とせず、寧ろ富や人員の不均衡を基に偏った分節を重層的に出現させながら、かつ祖先地産(特に共有地や祠堂)に対する共通の利害関心や外(盗賊や敵対する他宗族)に対する防御の必要性等のため

に全体の統合を保持するという、「非対称的分節化 Asymmetrical Segmentation」モデルが示された⁹⁾。無論、そこで彼は新界に関する特殊地域研究を行おうとしたわけではなく、寧ろ、前時代のシノロジストの研究や農村調査研究を媒介として中国（少なくとも華南地方）全体を見据えた議論を行ったし、そして、何より同時代のリニージモデルを媒介として通文化比較が可能なレベルまで議論の一般化を図ったのである。このように従来 particularistic な次元でしか語られてこなかった伝統中国の宗族組織の問題を更に universalistic な次元で語り得るものにしたことが、彼の最大の貢献であった。こうして構築された中国型リニージモデルは、彼に続く若手人類学者たちによる新界での研究 (Baker 1968, Potter 1968, Watson, J. L. 1975 = 1995 等) において、また、前節で触れた東南アジアでの華人研究においても、大いに依拠されたのである。

ところで、Freedman が念願の「生きた化石」の博物館に辿り着いた時期は、皮肉なことに、全体香港の工業化・都市化の中で新界が急速な構造変容に向かう時期でもあり、彼もそのような同時代的状況に対して少なからず注意を払っている。1963年の調査後に箇条書きのまま香港政庁に提出された報告書 (Freedman 1976) は、かなりの紙面を Freedman (1966 = 1987) の主要トピックでもある宗族組織のリーダーシップや風水に関する問題に割いているが、その後で、幾つかの重要トピックの研究必要性を示唆している。興味深いことに、その示唆内容は、60年代後半から70年代初頭にかけての若手人類学者による新界研究の新展開の見取り図を示している。例えば、当時の新界農村からの海外出稼ぎとその社会的影響に関する示唆は Watson, J. L. (1975 = 1995) で、戦後初期における中国本土から新界への流入移民（多くが市場志向型野菜栽培に従事）に関する示唆は

Aijmer (1986) 等で、戦後の工業化・都市化の中で急速に「陸上がり」していた水上生活漁民に関する示唆は Ward (1985) や可児 (1970) 等で、そして、やはり急速な変動期にあった新界の伝統的なマーケットタウンに関する示唆は Young (1974) や Blake (1981) 等で、それぞれ実践された。

(2) 80年代以降

このように、香港において、人類学即ち宗族研究という図式はかなり薄れたのであり、瀬川昌久によれば、70年代に新界でなされたフィールド調査に基づく Watson, R. S. (1985) は、ある意味で、人類学的宗族研究の一つの時代の終わりを告げるものであった。「ここに至って、宗族はもはや父系出自の原理から帰結する集団というよりは、その時代その地域における政治経済的な条件により生み出されたものであり、父系出自のつながりや祖先の遺徳の強調は、エリートが一般成員の団結や忠誠心を確保するために用いたレトリックに過ぎないとされたのである。こうした観点からの宗族研究は、宗族の組織的枠組みを構成している文化的規範や意味づけの問題の研究ではなく、ある形態の宗族の発達を促したりその解体を引き起こしたりする社会的な諸条件の研究を意味する。だがそれは同時に、親族集団という共通の基盤の上での他社会の「リニージ」との比較研究の可能性の終焉をも意味するものであった。」(瀬川 1997 p. 25) その背景には、70年代における世界的な人類学的親族研究そのものの大転換点、即ち「親族」や「出自」という概念の普遍性・通文化性が疑問視されるようになったという事情があり、こうした流れの中では、「親族」を政治経済的ないしは地縁的な諸関係から独立した、人類にとって最も基本的な関係の領域として特別扱いし、それをを用いて通文化比較を行うことの根拠が

根本的に問い直されることになった。結果として、80年代以降の香港では、宗族研究は、寧ろ社会史家が主導し、それと人類学者が提携するという形でなされることになった。(例えば、Hayse 1983、Faure 1986、Ebrey & Watson eds. 1986) また、80年代以降の新界での宗族に関する人類学者の研究(蔡 1988、Chun 1991、瀬川 1991等)も、多分に歴史重視の様相を呈している¹⁰⁾。無論、こうした事情は、新界に特有のものではない。(末成 1996) 新界の同時代的状況については、Chan 1997、深尾(1997)が非常に参考になる。

2) 都市研究

(1) 70年代

70年代以降、人類学者の関心は、新界の農漁村やマーケットタウンに留まらず、更に都市部(古い下町だけでなく、開発間もない当時のニュータウンも)の方にも拡大してゆき、概して、急速な工業化・都市化の中で伝統的移民社会形態が如何に解体され再編されてゆくかという問題が、様々具体的トピックを通して議論された。代表的な研究としては、ニュータウンにおける新来者のVAとリーダーシップに関するJohnson(1971)、町内会的な近隣社会組織である「街坊 Kaifong」に関するWong, A. K. (1972)、潮州系移民のエスニシティ(同郷結合)に関するSparks(1976)、福建系移民のエスニシティに関するGuldin(1977)、ニュータウンの中流家族のライフスタイルに関するRosen(1976)、客家系移民のVAに関する謝(1981)、工業化の家族制度(特に女性の地位)への影響に関するSalaff(1981)、ツーリストプレスにおける小売商の社会的ネットワークに関する森川(1986-7)、そして、上海系移民の企業経営とエスニシティに関するWong, S. L. (1988)等が挙げられる。興味深いことに、

こうした香港での人類学的な都市研究の進展において大きな比重を占めたのも、やはりVA(同郷・宗親・同業団体、「街坊」、民俗宗教系団体等々)に関する議論であり、そこでよく引き合いに出されたのが、当時隆盛を誇ったアフリカ等での「都市人類学」(M. Gluckmanを祖とする「マンチェスター学派」に代表される)の成果と共に、Freedman等が先に開拓していた東南アジアでの華人研究の成果であった。おそらく、70年代という時期は、華人移民社会としての香港を同時代の東南アジアの華人社会と横並びにして考えてもあまり問題なかった最後の時期であったと言えよう。

かくして、70年代の香港に関心を持っていた若手人類学者の多くは、Freedmanの宗族研究から距離を取ろうとして都市の方に目を向けたのである(幾人かの研究者が実際にそう言っている)が、皮肉にも、そのことはFreedmanの影響圏から脱却したことにはならなかったのである。特に先述の「残余中国」的発想とそれ故のローカル・コンテキスト切り捨てという問題に関して言えば、おそらく上記の諸研究のほとんどが多かれ少なかれ都市香港特有の事情を考慮していたであろうが、しかし、先の葉(臺灣出身の若手研究者)のように、それを殊更に重大視する者は出てこなかった。その要因の一つとして、70年代末という時期に至っても、香港の人類学界において現地人研究者の占める比重が非常に小さかったということが挙げられよう¹¹⁾。こうしたこともあってか、70年代末に中国本土が再度外部の研究者に開かれるやいなや、それまで香港の都市フィールドで研究に従事してきた若手・中堅人類学者の多くが中国本土の方へ研究の基点を移していった。このような事情は、結局のところ、「残余中国」的発想から自由になれなかった研究者たちをフィールド香港から完全に排除するという意味を持っ

ていたと言えるかもしれない。

(2) 80年代以降

とはいえ、それと同時に、80年代以降の香港の都市フィールドそのものが従来の人類学的枠組みにとって扱い難いものになったということも否定できない。無論、それも香港に限ったことではない。50年代に構造機能主義に対する内在的批判の中から胎動した「都市人類学」は、6、70年代には世界的に大展開を見せたが、しかし、80年代に入るや、目に見えて行詰りに直面した。構造機能主義によって閉鎖的な伝統社会の親族問題を中心に確立された社会規範・秩序重視の枠組みの画一化傾向に対して、都市化社会状況の動態性や個人々の主体的意思決定等の重要性を説いてきた「都市人類学」であったが、結局それが行き着いたところも、あまり先行者と大差のない画一化傾向であった。主としてアフリカの都市移住者研究等から生み出されたVA論やネットワーク論にせよ、エスニシティ論にせよ、結局は、都市の一面的な機能的側面ばかりが徒に重視される傾向があり、このような点が、80年代に入ると、大いに批判されるようになった。(松田1987) また、「都市人類学」の研究ニッチは、どちらかという、都市化のかなり初期段階にある後進地域の社会にあったのであり、そこから生み出された研究枠組みを、戦後初期の香港(伝統社会から放り出された「持たざる」難民が大多数を占めた)ならともかく、既に高度の経済発展と都市化を達成していた80年代以降の香港に当てはめるにはやはり無理があろう。では、先進地域も含めた現代都市社会を見るための人類学的枠組みが順調に開発されていったのかという、なかなかうまくいかなかったようである。最早、今日においては、「都市人類学」という呼称自体が、過去のものとなってしまった感もある。

こうした状況下で、香港での人類学的な都市研究も新たな展開のための模索期に入ったのであり、そこに幾つかの重要な流れを見出すことができる。まずは、先の80年代以降の新界での研究の展開と同様、やはり歴史学(特に社会史学)への歩み寄りという流れ。文字資料を豊富に有するという利点を持つVAの研究に特に顕著であるが、研究者たちは、同時代の参与観察と歴史資料の解釈を巧みに組み合わせ、対象組織の機能的側面だけでなく、それがあつた特定の歴史的・地域的コンテキストの中で、いつ頃から、何故、そして如何に生成し今日ある形に発展してきたのかという側面にも重点を置くようになり、前もって設定された抽象モデルによる議論の一般化に対して殊更にセンシティブになった。代表例としては、都市香港における同郷・宗親団体の歴史の変遷(特に戦前期の中国本土の都市VAとの連続性を重視)に関する吉原(1988)、道教系団体(「道壇」)の変遷に関する志賀(1995)、慈善団体の変遷に関する芹澤(1997)等が挙げられよう。こうした研究が進展した背景には、やはり新界での事情と同様に、当時の社会史学の著しい進展(Lethbridge 1978、可見 1979、Smith 1985、Sinn 1989等)という事情があつた。

次に、「カルチュラル・スタディーズ」への歩み寄りという流れ。この学際的潮流は、元来英米でのネオ・マルクス主義的文芸批評・マスコミ研究の中から出来てきたものであるが、折からの「オリエンタリズム批判」や「ポストコロニアル批判」といった流れと合流する形で、90年代の世界の学術界において厳然たる影響力を持つており、最早、それを過渡的なブームと見なすわけにもいかない。歴史的にオリエンタリズムやコロニアリズムとは切っても切れない関係にあつたとされる人類学(常にそうであつたとも思えないが)は、こうした批判的潮流のおかげで、非常に肩身

の狭い思いをさせられているわけであるが、中には積極的にそうした潮流に歩み寄って行く人類学者もいる(太田1996)。近年、やはり香港の都市研究においても、こうした傾向が顕著に表れている。例えば、1997年に出版された香港初の人類学的都市論集 Evans & Tam eds. (1997)では、その序章において、文化とアイデンティティの問題の重要性が強調され、それに関する基本的な論理枠組みが提示されている。いわく、文化とは「ヒトが意味(meanings)を構築してゆく絶え間なき過程、換言すれば、我々とは何者か、我々の生活は一体どういう意味があるのか、を語らんと努力する絶え間なき過程」そのもののことであるとされ、そして、人類学の文化研究は、絶えず起り得るこうした意味の変化が一つの文化の中で如何に生じるのか、また、そうした変化が更に大きな過程(工業化、グローバリゼーション、戦争、革命等々)から如何なる影響を被るのか、といった問題に関心が向けられるものであるとされる(Evans & Tam eds. 1997: 12-3)。こうした基本枠組みの確認後に扱われる題材は、エスニシティや親族、ジェンダー、民俗宗教等といった比較的馴染みのあるものだけでなく、例えば、「涼茶舖」(ハーブ茶専門喫茶店)の歴史、ドキュメンタリー・フィルム、中國銀行ビルの建築様式、パフォーマンス・アート、心霊現象の噂、「粗口」(廣東語スラング)等といった目新しいものまで含まれており、今日の香港を語る人類学者たちの関心の多様化が伺える。無論、こうした現代香港特有の都市文化に関する研究は、人類学者によって主導されてきたとは言い難く、寧ろ社会学者や歴史家、文芸評論家、マスコミ論者等の方が早い時期からそれに熱心に取り組んできたのである(呂・大橋編1989、洗編1993等)。

そして最後に、グローバリゼーションへの関心とでも呼ぶべき流れ。これには、まず80年代半

ば以降に急激に増大する香港から北米やオセアニアへの流出移民の移動・適応メカニズムに関する議論(人類学以外の領域の研究も多い)の流れがある(Skeldon eds. 1994=1997、森川1996等)。この時期には、人類学的海外華人研究の中心的フィールドはかつての東南アジアから北米の方にシフトしており¹²⁾、そちらの方でも香港からの移民の存在は、臺灣や一部の東南アジア華人社会からの移民等と共に、新しいタイプの華人移民(「華裔」として大いに注目されるようになっていた。この研究ニッチを発見したのが香港研究者が先か北米研究者が先かという問題は別にして、結果として、香港地域研究の一派生と北米での華人研究の展開とが交錯することになったのである。更にもう一つ、80年代以降の香港経済の一層の発展に伴い、それにプルされる形で集まってきた非華人系グループに関する議論の流れがある。例えば、フィリピン人メイドと雇用者=現地人との間のエスニック関係に関する Ozeki (1995)、香港の日系スーパーマーケットにおける雇用者=日本人と被雇用者=現地人との間のエスニック関係に関する王(1997)等の研究が挙げられよう。従来の香港やその他華人社会でのエスニシティ論では、華人内の同郷=方言集団間の関係に関する議論が中心を占めたため、こうした領域はほとんど扱われてこなかったものであり(先の葉の批判とも関係しよう)、その意味でも、以上のような試みは非常に重要な意義を持つ。

念の為に断っておくが、以上のような近年の香港における人類学的研究の趨勢に見られる三つの流れという区分方法は、あくまでも便宜的・暫定的なものである。当然ながら、歴史学よりのスタンスを採る者が文化的アイデンティティについて語ることも大いにあり得るし、また、移民やグローバリゼーションの問題を論ずる者が歴史的側面を踏まえながらアイデンティティの変遷を扱った

りすることもやはり大いにあり得る。

5. 今日の香港地域研究が呈する問題： 「語りの閉鎖性」

ところで、こうした最近の諸議論に目を通してみると、最早「残余中國」的発想で香港に関心を持つ者がほとんどいなくなったということに気付く。こうした傾向の背景には、当然予想されるように、自社会・自文化に強い関心を抱く現地人研究者の増加という事情が大きく働いている。こうした現地人研究者は、80年代後半より時代の要請に応える形で、「香港文化」・「香港人」論（先述のように、社会学者・歴史家・文芸批評家・マスコミ論者等が主導し、一部の人類学者も周縁的に合流）を活発に展開し、その語り部の中には、高等教育普及に伴う一般読者層の知的水準の向上を視野に入れつつ、積極的に中文で著述を行っている者も出ている。このような傾向は、個別ディシプリンの枠を超えた香港地域研究全般のいわば「本土化 indigenization」を表す格好の指標であるとも考えられる。かつて植民地香港の大学・研究機関は、分野を問わず、制度上でも研究上でも、西洋人によって主導されたが、時代が下るごとに、徐々に現地人研究者（ほとんどが欧米留学経験者）がそれにとって代わり、著述の方も、現地の一般読者層を無視した英文絶対から状況依存的な英文・中文併用へとという具合に変化してきた。

しかしながら、そうした傾向には無視できない負の側面もあり、その最たるものが、自ら強い「香港人」アイデンティティを持つ研究者たちの香港に関する「語りの閉鎖性」ということに他ならない。こうした研究者にしてみれば、自身の香港への強力な個人的思い入れ故に、それに関する語りにおいて、ローカルな次元での議論とより一般的な次元での議論を如何に折り合い付けるかと

いうことは、さして大きな問題にならないのかもしれないが、しかし、そういったことは、自社会・自文化を語る上での強みであると同時に、それを超える際の足枷ともなり得る。こうした問題は、地方史家ならともかく、何らかの形での議論の一般化・モデル化を目指すべきは人類学者にとって（多分に社会学者にとっても）、常に念頭に置いておかなければならないことであろう。

更に、以上とはまた別次元で、「語りの閉鎖性」は、語られる対象の限定性、即ち、語られる対象となるのが、多くの場合「香港人」であって、今日の香港社会を構成する多様な少数派集団（例えば、「大陸新移民」、東南アジア華人社会出身者、非華人系エスニック集団等々）ではないという形でも表出する（芹澤1998）。このような傾向は、単に人類学に限らず、香港地域研究全般に対して言い得ることであり、更に言えば、第2節で触れたような、現実における「香港人」という社会集団が呈する性格を大いに反映した結果であるとも考えられる。

6. 結びにかえて

香港の人類学は、大きな流れとして、西洋人を中心としたものから現地人を中心としたものへと徐々に転換してきた・している（無論、前者が後者によって取って代わられたわけではないし、また、非香港系の華人研究者や日本人研究者等が果たしてきた役割を無視するわけにもいかないが）と言えよう。それは、換言すれば、香港に関する語りが、universalistic な次元に重きを置くものから particularistic な次元に重きを置くもの（前掲の Evans & Tam eds. 1997 所収の諸論文に顕著）へ転換してきたということでもある。何度も言うように、これは、決して香港のみに特殊な事情ではない。

かつて香港（新界にせよ都市部にせよ）は、

「残余中国」的発想から語られることが多かったが、時代が下るにつれ、そのような発想の孕むローカル・コンテキスト切り捨てという問題が顕在化していった。しかしながら、その結果として顕著になったローカル・コンテキスト重視という人類学者たち（特に現地人研究者）の姿勢は、同時代の香港の現実的社会状況に起因する「語りの閉鎖性」という別の厄介な問題に足下をすくわれかねない危険性を孕むことにもなってしまった。

こうしたことは、自社会・自文化として香港を語れない筆者個人にとって非常に大きな問題であり、更に踏み込んで議論を詰めてゆきたいのではあるが、最早紙面も尽きたので、ここでは以上の問題指摘に留め、続きの議論は社会学の系譜を扱う次稿で行う。

<註>

- 1) ここでは、本人或いは祖先が中国本土にルーツを有す中国外に居住する人々（中国籍の有無を問わず）という広義の意味での「華人」という表記を用い、「中国人」という表記を意図的に避けた。
- 2) とはいえ、幾つか重要な差異も見いだせる。東南アジアの華人社会（特に大規模な人口を抱えた所）では、中華総商會に代表される華人全体（方言差や同郷性の壁を越えて）を束ねる上位組織が存在したが、香港では、相対的に、そうしたものがあまり発展を見なかった。その理由としては、香港の方が本土に近く、いざというときの移動が容易であったことや、また、香港では、華人系住民が対峙すべき非華人系集団（統治者の英国系は別として）が存在しなかったこと等が挙げられる。詳しくは、Sinn (1990) を参照されたい。
- 3) 既に40年代までに、費孝通 (Fei Hsiao-tung) や許煥光 (F. L. K. Hsu) といった著名な中国出身の人類学者・社会学者たちがLSEに留学していた。
- 4) 6、70年代に東南アジア諸地域でなされた華人系人類学者の研究には、臺灣出身者（ほとんどが欧米留学経験者）によってなされたものがかなりの割合を占めた。後で触れる香港での事情とは対照的に、臺灣で戦後のかなり早い時期から現地出身の人類学者が台頭した背景には、戦後初期に本土から相当多くの人類学者・民族学者が移ってきたこと（その多くが歴史学よりのスタンスから少数民族研究に携わった人々で、やはり臺灣でも少数民族研究を行った）や、かなり早期から中央研究院民族學研究所や臺灣大學考古人類學系等といった確固たるキー・ステーションを有したこと、そして、臺灣内外での華人（漢人）研究の展開において、李亦園 (Li Yi-yuan) のようなキー・パーソンがいたこと等が非常に大きい。戦後の臺灣の人類学の歩みに関しては、少し古いが、黄 (1984) を参照されたい。
- 5) 既に戦前期には、中国本土の大都市で多くの研究者 (J. S. Burjess, H. B. Morse, 仁井田陸、根岸信等) がVAについて議論しており、特に同業団体（それは中世ヨーロッパのギルドに較べて非常に同郷性が強いという特色を持っていた）が注目された。また、牧野巽による廣州での「合族祠」（海外華人社会で見られる宗親団体の原型となったのではないかと考えられる疑似的宗族組織）の研究も重要である。
- 6) このモデルによると、華人社会の最低層には、ごく小規模な団体（多くの場合宗親団体）が、中層には同郷団体（その構成単位は状況依存的で、村単位から省或いは複数の省単位まで様々）が、そして、最上層には、方言集団（廣東、潮州、福建、客家、海南等）による大規模団体や中華総商會や中華公所等の汎華人的な団体が、それぞれ配置される。小団体は上位団体の法人会員となっており、上位団体の理事は下位団体のリーダーから選ばれる。(Crissman 1967 p. 185) Crissman 批判としては、Sinn (1990) を参照されたい。
- 7) 厳密に言えば、Freedman 来港以前に、B. Ward が既に50年代初頭から新界で漁民の水上コミュニティに関する民族誌研究を始めていた。因みに、彼女もLSE出身者である。
- 8) 例えば、戦前期のJ. J. M. De Groot や M. Granet 等のシノロジストの研究や、農村フィールド調査に基づくD. H. Kulp、林耀華 (Lin Yueh-hua)、胡先晋 (Hu Hsien-chin) 等の研究。
- 9) 両著作の内容については、西澤・瀬川 (1991) を参照。
- 10) このような傾向に関しては、近年における蔡志祥 (Choi Chi-cheung) 等の香港の人類学者や歴史家を中心とした「華南社會研究會」の研究成果も非常に重要である。
- 11) 香港の大学に人類学の department (學系) が設置されたのは、1982年 (於香港中文大學) のことで、社会学のそれが60年代に香港大學と中文大學

の双方に設置されていたことを思えば、また、註3で触れた、戦後の早い時期から確固たる人類学のキー・ステーションを有し、前出の李亦園の後にも、王崧興 (Wang Sung-hsing)、呉燕和 (D. Y. H. Wu)、陳其南 (Chen Chee-nan) 等といった国際舞台で活躍する有能な人材を多数排出していった臺灣の事情を思えば、相当遅かったと言える。それゆえ、香港の人類学界は、現地人研究者養成という点では、香港の社会学界や臺灣の人類学界か

ら相当の遅れをとってしまった。

- 12) 葉 (1993) によれば、70年代末頃を境に、海外華人研究の中心的フィールドは、北米の方に移っており、その過程で華人系研究者 (北米出身か否かを問わず、ほとんどが北米各地の華人コミュニティでのフィールド調査を基にした博士論文を北米各地の大学に提出している) の占める割合も更に大きくなった。

参考文献 (アルファベット順)

- Aijimer, G. 1986 *Atomistic Society in Sha Tin: Immigrants in a Hong Kong Valley*. Acta Universitatis Gothoburgensis.
- Amyot, J. S. J. 1960 *The Chinese Community of Manila: A Study of Chinese Familism to the Philippine Environment*. Chicago: Department of Anthropology, University of Chicago.
- Baker, H. 1968 *A Chinese Lineage Village: Sheung Shui*. Stanford: Stanford University Press.
- Blake, C. F. 1981 *Ethnic Groups and Social Change in a Chinese Market Town*. Hawaii: The University Press of Hawaii.
- Chan, S. C. 1997 *Negotiating Tradition: Customary Succession in the New Territories of Hong Kong*. in Evans & Tam eds (1997)
- 蔡志祥 1988 「醮祭の人名リストに見られる親族の範囲」『文化人類学5—漢族研究の最前線』。
- Chun, A. J. 1991 *LA TERRA TREMA: The Crisis of Kinship and Community in the New Territories of Hong Kong and After "the Great Transformation"*. *Dialectical Anthropology* 16.
- Crissman, L. W. 1967 *The Segmentary Structure of Urban Overseas Chinese Communities*. *Man* 2.
- Ebrey, P. B. & Watson J. L. eds. 1986 *Kinship Organization in Late Imperial China: 1000-1940*. Berkeley: University of California Press.
- Elliott, A. J. A. 1955 *Chinese Spirit-Medium Cults in Singapore*. London: London School of Economics and Political Science Monographs of Social Anthropology No 14.
- Evans, G. & Tam, M. eds. 1997 *Hong Kong: The Anthropology of a Chinese Metropolis*. London: Curzon Press.
- Faure, D. 1986 *The Structure of Chinese Rural Society: Lineage and Village in Eastern New Territories, Hongkong*. Hong Kong: Oxford University Press.
- Freedman, M. 1957 *Chinese Family and Marriage in Singapore*. London: Her Majesty's Stationery Office.
- 1958 *Lineage Organization in Southeastern China*. London: The Athlone Press.
- =1991 末成道男・小熊誠・西澤治彦訳『東南中国の宗族組織』弘文堂。
- 1960 *Immigrants and Associations: Chinese in Nineteenth Century Singapore*. *Comparative Society and History* 3(1).
- 1966 *Chinese Lineage and Society: Fukien and Kwangtung*. London: The Athlone Press.
- =1987 田村克己・瀬川昌久訳『中国の宗族と社会』弘文堂。
- 1976 *A Report on Social Research in the New Territories of Hong Kong, 1963*. *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society*. 16.
- 深尾葉子 1997 「遅れてきた革命—香港新界女子相続権をめぐる「秩序の場」について」瀬川編 (1997)
- Guldin, G. E. 1977 *Little Fijian (Fukien): Sub-Neighborhood and Community in North Point*. *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society*. 17.
- Heyse, J. 1983 *The Rural Communities of Hong Kong: Studies and Themes*. Hong Kong: Oxford University Press.
- 謝劍 1981 『香港的惠州社團—從人類學看客家文化的持續』香港、中文大學出版社。
- 黃應貴 1984 「光復後臺灣地區人類學研究的發展」『中央研究院民族學研究所集刊』55。
- Johnson, G. 1971 *From Rural Committee to Spirit Medium Cult: Voluntary Association in the Development of a Chinese Town*. *Contributions to Asian Studies* 1.
- 可児弘明 1970 『香港の水上居民—中国社会史の断面』岩波書店。
- 1979 『近代中国の「苦力」と猪花』岩波書店。

- Lethbridge, H. 1978 *Hong Kong: Stability and Change*. Hong Kong: Oxford University Press.
- 李亦園 1970 「一個移殖的市鎮—馬來亞華人市鎮生活的調查研究」臺北、中央研究院民族學研究所。
- 呂大樂・大橋健一編 1989 「城市接觸—香港街頭文化觀察」香港、商務印書館。
- 松田素二 1987 「都市人類学」祖父江孝男編『改訂・文化人類学事典』ぎょうせい。
- 森川眞規雄 1986-7 「尖沙咀商人(1)-(3)」『評論・社会科学』(同志社大学) 30-32号。
1996 「カナダにおける香港移民のアイデンティティ—トロントの事例」可見弘明編『僑郷華南—華僑・華人研究の現在』行路社。
- 西澤治彦・瀬川昌久 1991 「M. フリードマンの宗族モデルの形成とその変遷—2冊の主著の邦訳刊行によせて」『民族学研究』56(3)。
- 大橋健一 1997 「香港都市社会研究の展開と課題—人類学と社会学の分業を越えて」瀬川編(1997)。
- 太田好信 1996 「人類学／カルチュラル・スタディーズ／ポストコロニアル・モーメント、あるいは新たな接合の可能性に向けて」『現代思想』24(3)。
- Ozeki, E. 1995 *At Arm's Length: The Filipina Domestic Helper—Chinese Employer Relationship in Hong Kong*. *International Journal of Japanese Sociology*. No. 4
- Potter, J. 1968 *Capitalism and the Chinese Peasant: Social and Economic Change in a Hong Kong Village*. Berkeley: University of California Press.
- Rosen, S. 1976 *Mei Foo Sun Churn: Middle Class Families in Transition*. Taipei: The Oriental Cultural Service.
- Salaff, J. 1981 *Working Daughters of Hong Kong*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 施振民 1976 「菲律賓華人文化的持續—宗親與同鄉組織在海外的演變」『中央研究院民族學研究所集刊』42。
- 瀬川昌久 1991 「中国人の村落と宗族—香港新界農村の社会人類学的研究」弘文堂。
1997 「香港新界の宗族村落—生きた化石における伝統再生」瀬川編(1997)。
- 瀬川昌久編 1997 「香港社会の人類学—総括と展望」風響社。
- 芹澤知広 1997 「公共住宅・慈善団体・地域アイデンティティ—戦後香港における社会変化の一面」瀬川編(1997)。
1998 「文化とアイデンティティ—「香港人」・「香港文化」研究の現在」青木保他編『岩波講座文化人類学(第13巻)文化という課題』岩波書店。
- 志賀市子 1995 「香港の『道壇』—近代民衆道教の一形態として」『東方宗教』85。
- Sinn, E. 1989 *Power and Charity: The Early History of Tung Wah Hospital, Hong Kong*. London: Oxford University Press.
1990 A History of Regional Association in Pre-war Hong Kong, in E. Sinn eds. *Between East and West: Aspects of Social and Political Development in Hong Kong*. Centre of Asian Studies, University of Hong Kong.
- 洗玉儀編 1993 「香港文化與社會」香港、香港大學亞州研究中心。
- Skeldon, R. eds. 1994 *Reluctant Exiles? Migration From Hong Kong and the New Overseas Chinese*. Hong Kong: University of Hong Kong Press. =1997 可見弘明・森川眞規雄・吉原和男監訳『香港を離れて—香港中国人移民の世界』行路社。
- Skinner, G. W. 1958 *Leadership and Power in the Chinese Community of Thailand*. N. Y.: Cornell University Press.
- Smith, C. T. 1985 *Chinese Christians Elites, Middlemen, and the Church in Hong Kong*. Hong Kong: Oxford University Press.
- Sparks, D. W. 1976 The Teochiu: Ethnicity in Urban Hong Kong. *Journal of the Hong Kong Branch of the Royal Asiatic Society*. 16.
- 末成道男 1996 「人類学と歴史研究」『東洋文化』(東京大学東洋文化研究所) 76。
- Tan, C. B. 1986 *The Baba of Melaka: Culture and Identity of Chinese Peranakan Community in Malaysia*. : Pelanduk Publications.
- Tien, J. K. 1953 *The Chinese of Sarawak: A Study of Social Structure*. London: London School of Economics and Political Science Monographs of Social Anthropology No 12.
- Traver, H. 1984 Social Research in Hong Kong: Past and Present. in A. Birch, Y. C. Jao and E. Sinn eds. *Research Materials for Hong Kong Studies*. Hong Kong: Centre of Asian Studies, UHK.
- Wang, G. W. 1991 *China and Chinese Overseas*. Singapore: Times Academic Press.
- Ward, B. 1985 *Through Other Eyes*. Hong Kong: The Chinese University Press.

- Watson, J. L. 1975 *Emigration and the Chinese Lineage. The Mans in Hong Kong and London*. Berkeley: University of California Press. =1995 瀬川昌久訳『移民と宗族—香港とロンドンの文氏一族』阿吡社。
- Watson, R. S. 1985 *Inequalities among Brothers: Class and Kinship in south China*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Willmott, W. E. 1967 *The Chinese in Cambodia*. Vancouver: University British Columbia Press.
- Wong, A. K. 1972 *The Kaifong Associations and the Society of Hong Kong*. Taipei: The Oriental Cultural Service.
- 王向華 1997 「香港の一日系スーパーマーケットの組織文化」瀬川編（1997）。
- Wong, S. L. 1988 *Emigrant Entrepreneurs: Shanghai Industrialist in Hong Kong*. Hong Kong: Oxford University Press.
- Wu, D. Y. H. 1982 *The Chinese in Papua New Guinea: 1880-1980*. Hong Kong: The Chinese University Press.
- 葉春榮 1993 「人類學的海外華人研究：兼論一個新的方向」『中央研究院民族學研究所集刊』75。
- 吉原和男 1988 「移民都市のボランティア・アソシエーション—香港の宗親団体と同郷団体」『文化人類学 5—漢族研究の最前線』。
- Young, J. A. 1974 *Business and Sentiment in a Chinese Market Town*. Taipei: The Oriental Cultural Service.

*UHK=University of Hong Kong, CUHK=Chinese University of Hong Kong

**紙幅の都合から、一部例外を除き、本文で言及した研究者の最も主要な著作のみを掲載